

▶ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林

10・5刊 四六判300頁 本体2200円
アストラハウス



歴史に根ざす土地と人を青年が語る

「東北文芸復興」作家鄭執の初の日本語訳小説集

金雪梅

『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林』(関根謙訳)は、作家鄭執の中国語の小説集『仙症』から、表題の三作を翻訳した日本語としての初の小説集である。鄭執が中国で本格的に作家として注目されるようになったのは、投稿作品の公平性を重視するための2018年、匿名作家計画「コンテスト」において、本書に取められている「ハリネズミ」が初の賞を受賞したのがきっかけである。さらに中国文学界で權威のある雑誌『鐘山文学』を発行する雑誌社がこの作品に『鐘山』の星文学賞を与えている。鄭執は小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍している。彼の作品のいくつかはすでに映画化されたが、特に2024年8月に中国全土で上映された映画『刺』(ハリネズミ)が原作)は、上海国際映画祭で最優秀脚本賞を受賞した。こうした経歴を持つ作家の自信作を集めたのが、この翻訳集である。

鄭執は1987年、中国の東北部瀋陽に生まれ育つ。各小説の舞台となる瀋陽は、清朝の発祥地として知られ、「滿洲国」時代には「奉天」と呼ばれ、政治と経済の中心地として今も中国東北の三省の中で最大の都市である。1990年代後半の国営企業の経営不振により大規模なリストラの波が起き、その時の瀋陽の姿をドキュメンタリーにした「鉄西区」(王兵監督)も有名である。

今までの東北出身の現代作家としては『アルクン川の右岸』の著者 遲子建が最も代表的だったが、近年次々と東北の青年作家が文壇に登場し、「新東北作家群」「東北叙述」「東北イメージ」などのテーマが中国文学界で注目を集めている。「東北文芸復興」という言葉はジョーク混じりで2019年から使われ始め、音楽・ドラマ・演芸などのジャンル以外に、文学にも適応され、同じ「180後」作家として、鄭執も「東北文芸復興の三傑」(双雪涛、班宇、鄭執)の一人として名を連ねている。東北は自然豊かな地域である一方、長年の経済低迷と競争力の低下が顕著であった。その中で、「東北文芸復興」は、文学の復興、文芸創作を通じて東北への理解を深め、地域の記憶や文化・歴史を再構成しようとする動きだと見える。今回、鄭執の作品が日本で読まれるのは、歴史的な東北の紹介はもろろん、新たな世代による文学潮流の紹介としても意義がある。

『ハリネズミ・モンテカルロ食人記・森の中の林』はその謎めいたタイトルに反して、三作とも90年代の瀋陽を舞台のメインとしている。青年を語り手として過去の世代の社会と人間模様、また家族内の複雑な絡み合いをユーモアを交えて描いた中、短篇小説集である。小説はフィクションではあるが、本小説集は作家の裝飾のない真摯な言葉で、過去の真実を優しく引き出し、ユーモアと温かみが包む作品群である。

「ハリネズミ」は語り手「私」の視覚から精神障害を持つ伯父王戦団の半生を描いた物語である。小説の冒頭は「一匹のハリネズミを指揮して、道路を渡らせようとしていた」王戦団の不思議な行動から始まる。王戦団は文化大革命中の軍隊内での派閥闘争に巻き込まれ、「精神病」を患った。しかし伯母は精神障害のレットルを恐れ、民間療法を試す。中国東北ではシャーマニズムの影響が色濃く、動物に靈的な力が宿っていると信じられている。その中でハリネズミは「五大仙」(キツネ、イタチ、ハリネズミ、ヘビ、ネズミ)の一つとして信奉されている。ハリネズミ(「白仙」)は病気を治す仙として崇拝され、王戦団の治療にも使われる。周囲から「異端」と見做される伯父と吃音がある私の治療をめぐる、家族はなぜ民間信仰とはいえず「迷信」のハリネズミを祀ることを諦められないのか。本小説は「病氣」をめぐる民間信仰にすぎない無力感と信仰の滑稽さを諷刺する力を備えている。因みにこの小説の原題は「仙症」で、瀋陽方言では「精神病」を意味するとされるが、一般にはあまりの耳にしない言葉である。本作品の魅力は何と云っても王戦団という人物の描写にある。彼は奇妙な行動をとる一方、知識人もあった。彼を取り巻く人々の振る舞いを通じて、「仙症」ないし「精神病」の定義も描れていく。

「モンテカルロ食人記」は上の「ハリネズミ」と違って完全なファンタジー小説である。母は家を出て姿を消し、父との間にも葛藤がある語り手の「私」は恋人と駆け落ちを決意し、「モンテカルロ」というレストランで彼女を待つ。約束時間が過ぎても恋人は来ず、なぜか意外の人、叔母と離婚した叔父が入ってくる。異常な厚い雪に閉じ込められた空間で、時空を超えて叔父と家族の歴史を聴く。いつまでも現れない彼女のことと叔父の説教口調で続く家族の悪口に耐えきれず、「私」が限界を超えたその時、意外な展開を迎える。時代に伴った生活の変化を余儀なくされる人々、青年の現実から脱出したい心情と生活の外れた現状が物語から伝わってくる。

「森の中の林」は、瀋陽に暮らす一家三代の物語を五つの章で異なる語り手によって描いた中篇小説である。最後の章は日本が舞台になっている。土地・人・家族への愛をテーマに、リアルな瀋陽の街と社会風情が視点と時代背景を交差させながら語られ、最後には田舎のように一つにまとまる。一部ではあるが、瀋陽に存在する朝鮮族や瀋陽と東京の駅の類似など複雑で多層的な東北の近代史も小説は取り入れている。本書の最後にある作家のメッセージでも触れられているように、この小説は日本でも「浅からぬ繋がりを持つ作品である」。

本翻訳集は、日本の読者に配慮し、翻訳者が中国や東北地方の歴史用語や固有名称、特有の言い回しに詳細な注釈をつけているため、非常に読みやすい。小説には民間信仰や厚い雪、瀋陽の街以外にも、東北の描写は溢れている。本書は一括りにしがちな中国「ではなくその中の一つの地域に生きる人々の歴史と現在へ日本の読者を誘っている」(東京外国語大学大学院博士 後期課程)